



JUDGEMENT

scene-4

鳴海はるか

「ベルフェ、後ろだ！」

「もちろん分かっていますよ。」

フルーレの言葉に頷きながら、ベルフェは体を回転させつつ蹴りを放つ。

その蹴りは正しく天使の顔面に叩き込まれ、そして顔面を粉碎していた。

天使はその勢いで壁まで吹き飛ばされると、それ以上起き上がってくることはなかった。

「今回はこれで終わりか？」

フルーレは辟易とした顔で呟く。

「ここ最近の向こうの出方を鑑みるに、そうなんでしょうね。」

「なんかここ最近のやつらの行動がおかしいって言うか、しっくりこねえんだよな。」

「ええ。ここ最近は天使が出てきても一、二体、場所をはてんでバラバラで天使もただそこに居るだけという言うことが多い。最初は陽動かと思ってわざと貴方と別行動をとったりしていましたが、こうして同じ場所に居ても別のどこかで他の動きを感じるでもない。時折神の気配を微弱に感じることはありますが、それも本当に一瞬のもので、攻撃の意思は見られませんしね。」

二人にはここしばらくの行為が斥候であるだろうことまでは予想していたが、それ以上のことを推測するまでには至らなかった。

「いっそのことフルーレに大暴れしてもらいましょうかね。囚代わりに。」

「いや、もっと敵の動きを観察してから行動するべきだ。軽率な行動で動くと他に犠牲が及ぶことがある、だろ？」

ベルフェの軽口にフルーレは珍しく正論で返す。前回の一連の事件がフルーレにとってかなりトラウマになっているのは明白だった。

「まったくもってそのとおりです。お気を悪くされたのならば本当に申し訳ありません。」

「はっ、ベルフェが謝ることじゃないさ。ただ大事な俺のパートナーに何かあるといけねーからな！」

そう言ったフルーレの顔には、いつもの笑みが浮かんでいた。

それからしばらくすると、神側からの干渉が急にピタリと止んだ。

これが体力の消耗が激しいときならば両手を挙げて喜べたが、今のこの状況では手放しで喜べるものではなかった。

何も無いが故にいつ何時、状況が変わるか推測できない。

それはすなわちいつ状況が変わってもおかしくないということだ。今日なのか、それともずっと先のことなのか。

それに加えてフルーレはもともと我慢することが苦手な性格だった。

ベルフェは逆にこうしたことに対してはかなりの耐性がある。

だからこういった場合には今までもフルーレのストッパー役として立ち回ってきた。

だが、今回は珍しくフルーレは冷静さを保っていた。彼を知る物から見れば奇異に映るだろう。

実際にベルフェは当然のごとくフルーレの様子に気が付いていた。

しかも、実際には少し前からだ。

けれども今、ベルフェはフルーレにどう対処すべきか考えあぐねていた。

傍目にはこのような時に冷静で居られることは良いことだろう。

しかし、ベルフェはこの状況がフルーレ自らの身を滅ぼす引き金にならないかとそれを心配していた。

「何も心配要らないさ。敵が出てくるまで待つ。出てきたら叩く。それだけさ。」

おもむろにフルーレが口を開いた。ベルフェがその様子をじっくりと見ながら言葉を返す。

「そうですね。貴方の言うとおりで。それでは紅茶でも淹れてきましょうか？たまには何気ない会話をしながらティータイムを過ごすのも悪くはないでしょうから。」

「ああ、そうだな。それじゃ俺はストレートで頼むわ。」

「かしこまりました。少々お待ちください。」

しばらくしてベルフェがティーセットを持って部屋に戻ってきた。

フルーレはおとなしく椅子に座っていた。

ベルフェはフルーレと自分のカップとソーサーを置くとソファに腰掛ける。

「しかし本当に久しぶりだよな。こんなに平和なのは。」

フルーレは紅茶を啜りながら呟いた。

「まったくです。大なり小なり毎日小競り合いがありましたからね。ちょうどいい休暇になりました。」

「だな。たまにはゆっくりするのもいいもんだな。いっそのことこのまま何もなきやいいんだけどな。」

「まったくです。それでは今度暇なときにどこか旅行にでも行きますか？」

「はっ。野郎二人で旅行なんか考えたくねーぜ。せめて菜奈でもいりゃあー」

フルーレは言いかけてはっと口をつぐんだ。だがベルフェは何事もなかったかのように続けた。

「これはこれは手厳しいですね。男同士で二人旅と言うのもなかなか趣があると思ったのですが。」

「・・・まあ、そこまで言うなら付き合ってもいいけどよ。ところで一応聞いておくけどお前、男が好きだとかいわないだろうな？」

「そこはあえてノーコメントと言うことにしておきましょう。」

「・・・やっぱり旅行の話は無しな。」

「貴方は本当につれないですねえ。細かいことを気にしていたら人生損しますよ？」

「俺たちは悪魔だから人生じゃなんじゃね？悪生とか。」

フルーレがやれやれといった感じでカップを持って窓の方へ歩いていった。そしてカップに口を付けた後、動きが止まった。

ベルフェがその様子に気が付いて声を掛ける。

「どうしました？まさか神・・・いえ存在は感じませんね。」

「・・・ベルフェ、こっちに来てくれ。アレがお前にはどう見える？」

ベルフェは席を立つとフルーレの指差す方向を見る。

「あれは・・・菜奈さん・・・？」

ベルフェの制止の声も聞かずにフルーレは走り出していた。

「フルーレ、待ってください！あの人影からは神の存在が感じられませんが、菜奈さんの気配も感じません！迂闊に手を出さない方が賢明です！」

「はっ、だからこそ実際に出て行ってやるんだよ。神がいてもいなくてもぶっとぼすだけさ！」

そんな会話をしている間にもフルーレは邸の門扉を開け外に出る。

菜奈のような人影はそこからそう離れていないところに立っていた。

「おい！お前誰だよ？」

その人影が振り返り、そして口を開いた。

「私のこと忘れちゃったの？」

それは間違いなく菜奈だった――。

「お前、どうして……。」

フルーレはやっとのことで声を絞り出した。ちょうどベルフェも到着したが、やはり同じように驚きを隠せないでいる。

「どうもこうもないわよ。そういえば最近寄ってなかったからどうしてるか気になって。」

「いえ、そうではなくて。菜奈さん、記憶は問題ないのですか？」

フルーレが聞く前にベルフェが疑問を投げかける。

「記憶？どうしてそんなこと聞くのよ？私が瀕死になった記憶？」

二人は驚きで固まってしまう。

フルーレは菜奈が自分たちのことを覚えていてくれたことに対して。

ベルフェは自分の掛けた魔法が効いていなかったことに対して。

「ねえフルーレティ、あの時私を助けてくれてありがとう。貴方がいなかったら私きっと死んでたわ。」

菜奈がフルーレに抱きつきにいこうとした。

「べ、別にそんなすげーことしたわけじゃないさ。」

フルーレが菜奈の体を受け止めようとした。

「フルーレ！それは菜奈じゃありません！菜奈は貴方のことをフルーレリティとは呼びません！」

だがベルフェがそういったときにはもう遅かった。

フルーレの背中から刃が生えていた。いや、彼の体を剣が深々と貫いていたのだ。

「ゲハッ！」

フルーレが血を吐き出す。もちろん剣が刺さっている傷口からもどンドン血が出ている。

そして菜奈の姿をしたものは、彼女が今まで浮かべたこともないような邪悪な表情をしてフルーレの顔を見ていた。

そこへベルフェの腕が伸びる。

菜奈の姿をしたものは、素早くそれをかわしながら針のような物を放ってくる。

ベルフェの手がそれを払いのける。

「そのような攻撃では私に傷一つ付けられませんよ。さて、それではこちらから行かせてもらいます。」

ベルフェの足が地を蹴り菜奈の姿をしたものに近づこうとしたとき、そいつは後ろに避けながら球のようなものを無数に空中に投げた。

ベルフェが反射的にその球を手で払いのける。

「！しまった！」

ベルフェが球に触れた瞬間に、周囲を濃い煙が立ち込めて何も見えなくなった。

「まさかこんなイーリートラップに騙されるとは情けない……。」

そして煙の中、声だけが響いてきた。

「ベルフェゴール、今回は私も仮初めの体で来たので君の相手までするつもりはない。だが今回の傷でしばらくはフルーレティは戦うことはできまい。では、近いうちにまた会おう。」

その気配がなくなると、煙も少しずつ晴れてくる。

ベルフェはフルーレの許へ行くと傷の状況を素早く診断する。

「なるほど、神器の剣だったんですね。傷の見た目以上にダメージが大きい。エネルギーもだいぶ吸われているようですし。戦闘に持ち込まずに敵を追い払えたのはやはり良い判断でしたね。」

ベルフェはフルーレを担いで邸の中へと戻っていった。

だが、この時点は誰も気付いていなかった。事の始終を見ていた者がいたことを。

ベルフェの速やかな治療によって、フルーレの体の傷はほとんど目立たないくらいまで癒えていた。

フルーレ自身も刺される瞬間おそらく身を捻って急所をずらしたらしく、それも不幸中の幸いだった。

だが、神器によるエネルギードレインの影響は思いの外大きいものだった。

フルーレから感じられる魔力は微弱になっていたのだ。

命には別状はないが、また戦いに赴くには少々時間がかかるだろう。

最悪ベルフェの魔力をフルーレに移すということもできないわけではないが、あの神の言い方だと近日中に何らかの動きがあるのは間違いない。

魔力を移すことというのは移した側の魔力分だけ相手側の魔力が回復するというわけではない

。

その間にかなりのエネルギーの損失を生じるのだ。

だから魔力の移動をした場合には二人とも疲労した状態になる。

そこに敵の攻撃を受けようものなら、最悪二人ともが窮地に陥るというわけだ。

だからこの今の状態でフルーレに魔力を分け与えることはできない。

「まったくもって今回は私の責任ですね。」

ベルフェは自嘲気味にそういった。彼はフルーレを止めることができなかった。

そこには自分自身も菜奈の姿を見て、動揺していた現実があったからだ。

怪しいとは思ったものの、あの時にはおかしい気配を感じる事がなかった。

それ故にひょっとしたら記憶を無くした菜奈ならおかしい気配もないのではないかと。

結果として自分の考えの甘さに嫌気がささざるを得なかった。

ベルフェが何度目かになる溜め息をついたとき、フルーレが目を覚ました。

「どうですか？体の具合は？」

「傷は治してくれたみたいだから痛みはねえけど、魔力が相当奪われてるな。食べたり寝たりは問題ないだろうけど、それ以上は無理だな。ちょっと時間かかるかもしれないな。」

「申し訳ありません。私があの時断固として止めることができているならば・・・。」

「はっ、何言ってんだよ。俺がお前の忠告を聞かないで突っ込んでいったんだぜ？自業自得ってもんさ。ところであのときのヤツはどうなったんだ？」

「とりあえず追っ払っただけです。ただここ数日中にも再戦しなければならなさそうですね。先方がそう言ってみえましたからね。」

「やれやれ、あいつ自信満々じゃねえかよ。それで、俺は戦えないけど一人で大丈夫そうか？」

「何も問題ありません。と言いたいところですが、今回のやり方からしてなかなかのやり手だと見受けました。正直に言うならば、できれば貴方と二人の方がいいですね。ですがそんなことも言っていられませんから、今回は私一人でどうにかしてみますよ。」

それから二日後。

予想もしていなかった方法で、二人の元へ件の敵がコンタクトを取ってきた。

それは、ポストに手紙が投函されていたのだ。

これには二人とも正直に驚いてしまっていた。

「本日午後10時、北上代公園に来てもらいたい。一人で来ようが二人で来ようが問題ない。それではご健闘祈る。 ———アンキーセース」

敵にこのように書状を送ってくる者には二種類ある。

一つは自信過剰な愚か者。

そしてもう一つは自身だけでなく実力を持つ者。

この場合に後者であるのは明白の理だった。

「正直怪しすぎると思うけど行くんだろ？」

もうすぐに約束の時間が訪れようとしていた。フルーレが投げやりな口調で言うのをベルフェが普通に答える。

「行かざるを得ないでしょう。敵の罠にはまりに行くようなものですが。もし危なそうならば、すぐに逃げ帰らせてもらいますよ？」

「ああ。無理はするなよ。まあできそうなら俺の代わりにポコっといてくれ。」

「了解しました。あまり期待しないでお待ちください。」

指定の公園は、それほど遠くではなかった。

ベルフェは目立つのを避けるために徒歩で公園へ向かった。

「さて、とりあえずここまでは何事もなく来れましたね。指定の時間まではあと5分といったところですか。」

ベルフェが周りに気を配る。

まだ結界は張られていない。公園内には思ったよりも多い人間と犬や猫などの気配があるだけで、神や天使の気配はなかった。

そこで、急に声が聞こえた。

「ようこそ、ベルフェゴール。やはりフルーレティは今日は来られませんでしたか。まあ今日は貴方を倒すだけで良しとしましょう。それではそろそろ火蓋を切りましょうか。」

それを合図に結界がこの公園全体を覆っていくのをベルフェは感じていた。

だが、それと同時に異変を感じてもいた。

結界の中の人間や動物が動いている。通常結界の中で動けるのは神か悪魔のみ。

そして——アンキーセースの気配を感じない。

「どうしたんですか？」

急に後ろから声を掛けられてベルフェは飛び退く。

見た目は普通の人間の男だった。だが——その手にはナイフが握られ、ベルフェの背中にも鈍痛を感じていた。

「不意打ちですか。しかし私を負かすのには傷が浅すぎましたね。」

その男へベルフェが飛び掛ろうと身構えたとき、いきなり後ろから殴打されたような衝撃が体を襲った。

「なにっ!？」

地面を転がりながら見ると、最初の男とは違う男がバットを持って立っていた。ナイフの男も変わらずいる。

そして続々と人間がベルフェの周りを取り囲み始めていた。よく見れば人間だけでなく犬や猫も混じっている。

「これはどういう……。」

ベルフェが状況を飲み込めない間にも、次々と攻撃が繰り返されてくる。

だが、今はこれが本物の人間なのか幻術の類なのか分からない。

人間相手だとすると、本気で攻撃はできない。本気で攻撃してしまったら、もちろん人間など即死だ。

ベルフェは使い魔からトンファーを取り出して攻撃を避けながら反撃の機会を窺うことにした。

たぶんこの中に本体が混じっているはず。それを見破ろうとしたのだ。

「どうしました？ベルフェゴール。貴方はもう少し楽しませてくれる相手だと思っていたのですがその程度ですか？あまり私をがっかりさせないでください。それではもう少し激しく行きましょうか。」

今のアンキーセースの声がどこから聞こえたかを探ろうとしたが、前後左右と斬りつけ殴られるのを避けながら場所を特定することはできなかった。

そしてベルフェは確実に消耗させられていった。

攻撃を避けながらもあまりにもその数が多すぎるが故に徐々に増えていく傷。

その反面、こちらからは容易に手出しができない。

「バウワウッ！」

犬が数匹トンファーに噛み付き動きを封じられてしまう。

「しまった！」

その間に四方から攻撃が来る。トンファーを離すがその攻撃は避けるスペースも無い。

まさに絶体絶命だった。

一撃一撃は軽いものの、その数は多い。

ベルフェはしゃがみこみ、足元から切り込もうと考えたその時――

「そんなところに隠れてるんじゃないわよ！この卑怯者！」

聞き覚えのある声とともにベルフェの周りを取り囲んでいた人間たちがその場に倒れ始めた。

そして目の前を遮る物が無くなったベルフェの目の前に、地面に倒れる神、アンキーセースの姿と女の子の姿があった。

「そんな、菜奈、ですか……？」

「その通り。松田菜奈ですよ。本物のね。」

「やはり記憶はなくなっていなかったのですか？いえ、それよりもこの間偽者に騙されたばかりなので鵜呑みにはできません。」

その時地面に倒れていたアンキーセースが鼻血をたらしながら立ち上がった。

「お前ら、人のことを無視してゴタゴタ言ってるんじゃない！まだ勝負はついてないぞ！」

激昂したアンキーセースが二人目掛けてナイフのように鋭くなった羽根を無数に投げつけてくる。

ベルフェは剣と盾を、菜奈は刀を使い魔から取り出す。

そしてベルフェは盾で守りながら、菜奈は刀で羽根を弾きながら間合いを詰める。

「あんたさっさと負けを認めたほうがいいんじゃないの？こんな攻撃、私たちに通用するはずないでしょ？認めるならさっさとあの世へ送ってあげるわよ？あの世があればだけどね。」

菜奈の挑発にも乗らずにアンキーセースは羽根を投げ続ける。だがやはり間合いは少しずつ詰まってきていた。

あと一歩で間合いに入る！

「はっ！」

菜奈が頭を、ベルフェが胴を狙って薙ぎ払う。

だが、二人の攻撃は空を切っていた。

アンキーセースのいた場所の地面には穴が開いていた。

「もしや地中を進んで！？」

ベルフェが叫ぶ。だがその時菜奈の視界にほんのわずかだが、きらりと一瞬だけ光るものが見えた。

「ベルフェ！地面じゃない！攻撃は上から来る！」

菜奈が素早く上方に向かい刀を走らせる。

プツリプツリと極細の糸のようなものが切れていく。相当細いためか、ほとんど手応えもないうえに視認も容易ではない。

ベルフェも菜奈に倣い刃を振るう。だが一瞬出遅れたベルフェには、糸がすぐ傍まで迫ってきていた。

「くっ、これは少し状況が悪そうですね。」

そのとき身を守るために上にかざしたベルフェの盾の一部が、豆腐でも切ったかのように綺麗に切られて落ちてくる。

「この切れ味・・・！もし一撃でも受ければ体が輪切りになってしまいますね・・・。」

ベルフェはそのまま盾を上を放り投げる。盾は舞い上がりながら無数に切り刻まれていった。

ベルフェは空いた手で、使い魔からもう一本剣を取り出す。

だが――その手が剣を振るうことは無かった。そして、どさりと腕が地面に落ちる音が、やけにその場に響くかのようなだった。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思ひます。
そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。
それでは、次回作でまたお会いできることを祈って――。

2013年7月1日

JUDGEMENT scene-4

<http://p.booklog.jp/book/68801>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68801>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68801>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ